

ラグビー・トップリーグ経営にみる企業スポーツモデルの現状と課題

Current conditions and prospective issues on the management of Japan Rugby Top League

1K04B041-4

奥 健太

指導教員

主査 木村和彦先生

副査 武藤泰明先生

目的

ラグビー・トップリーグは「企業スポーツの堅守」を掲げ 2003 年に開幕し、今年で 5 年目を迎える。プロ野球、Jリーグ、bjリーグなどに代表される「プロ化」が進む今日のスポーツ界において日本独自ともいえる企業スポーツのモデルを守り続けることは時代の潮流からの逆行であるように見える。1980年代に全盛を迎えた企業スポーツ文化も 1990年代の経済不況を境に下降線を辿っている。長年企業スポーツとして各地方別にリーグ運営されていたラグビーも 1990年代以降はプロ化に成功したサッカーの後塵を拝してきた。

しかしその中で新しい「企業スポーツモデル」を掲げたラグビー・トップリーグは開幕からの 4 シーズンで一時期の停滞期を乗り越え、安定した業績を収めている。さらに Jリーグなどの経営に関する先行研究は存在するものの、トップリーグの経営に関するものは未開拓な状態であるのが現状である。そこでそのトップリーグの経営モデルの現状と課題を事例や比較分析を基に検証し、その特異性および優位性を明らかにすることを本研究の目的とする。

方法

- 1) ラグビー・トップリーグに関する文献、ウェブサイトによってサッカー・Jリーグの事例を中心に他のスポーツリーグ経営と比較し考察する。トップリーグが唱える企業スポーツモデルの特異性および優位性を明らかにし、その方向性を検討する。
- 2) ラグビー・トップリーグの事例およびデータは Jリーグとは異なり非公開な部分が多く、1)のみでは検証は非常に困難であるため、トップリーグの最高執行責任者(COO)である稲垣純一氏へのインタビュー調査を行うことでトップリーグの詳細な経営の実態を明らかにし、その現状と課題を検証する。

■比較の視点

- ① 歴史
- ② 経営モデル構造
- ③ セカンドキャリアへの取り組み

④ 強化

現状と課題

ラグビー・トップリーグの観客動員数は4シーズンで停滞期はあったものの、近年はその危機を乗り越えつつある成長推移を見せている。また Jリーグ(J1)より多彩な地域での興行や企業スポーツ独自の企業人と選手の両立やセカンドキャリアの完備など他のリーグ経営にはない優位性、特異性も見られる。

また今シーズンから日本協会の組織の中にトップリーグ専門の運営組織が発足し強化と普及に関する環境を整えてきた。しかしサッカーの前例にあるように 2015年のラグビー・ワールドカップなど国際大会の招致、開催のためには観客動員数や地域戦略、日本ラグビー協会との円滑な連携など、課題は多い。その現状は Jリーグなど他のリーグ経営との比較分析によってより明瞭に理解することができる。

考察

ラグビー・トップリーグは野球ともサッカーとも異なる企業スポーツを全面に重視したスタイルを構築しようとしている。5年間の経営で急激な成長はなかったものの、着実にその運営環境は整備されている。さらに企業スポーツモデルとして他のリーグにはない経営構造、キャリアサポート、地域戦略など多くの特異性を持つリーグになりつつある。しかし存続のための経営という視点から見れば安定していると言えるが、現状の日本ラグビー協会の方針でもあるサッカーのような国際大会の招致、具体的には 2015年以降のラグビー・ワールドカップ招致を実現させるには観客動員数はもちろん、多くの点で課題山積の現状がある。さらにその課題を解決するための施策としてプロ化に踏み切ることが最善であるかについてはラグビーの競技性やスタジアムの建設問題などの現状を考えても解決策にはなりえないと推測できる。あらゆる点で発展途上にあるラグビー・トップリーグの企業スポーツモデルをより研磨させ、リーグを発展させていくことが当面の課題であると考えられる。